

『JFA2005年宣言』

Road
MaP

実現に向けた

ロードマップ

JFA2005年宣言実現のためのロードマップの作成

「JFA2005年宣言」実現に向けて

「JFA2005年宣言」は、我々のミッションステートメントであり、日々のあらゆる活動を方向付けるものです。2015年の約束、2050年の約束の実現に向け、さまざまな取り組みを重ねてきています。

しかしその約束は、漠然とイメージとしてとらえているだけでは、実現に近づいていきません。非常に実現が難しい目標であるだけに、それが単にイメージ化してしまってきてつつある感も否めません。気がつけば10年がたってしまった、ということになりかねません。しかし、これは単なるシンボルではなく、総力をあげて目指すべき目標です。

特にまずは2015年、世界のトップ10を目指すという約束の実現を、どのようにしていくのかを具体的にイメージし、それを皆で共有していく必要があります。それを明確にすることを目的として、今回2005年宣言の実現、2015年トップ10に向けてのロードマップを作成しました。2015年に向け、2009年、2012年と中間の目標を明確にしつつ、実現の方法をイメージするためのものです。

目指す姿を全体像としてとらえる

2015年の約束を、現実のこととして目指すに当たり、部分の取り組みの集積ということではなく、全体像として、目指す姿を確認する必要があります。さまざまな取り組みはリンクしているものであって、それらを総合的視野でとらえることが重要です。

リンクしているからこそ1つの改革が他の領域の壁に遮られてしまうといったことも多々あります。だからこそ全体像をとらえ、マクロ的視野で全体を改革していく勇気が必要なのです。

目指す姿からの逆算

とかく現実の体制から発想をスタートしてしまいがちですが、それでは目先の困難さばかりが目に入り、先に進まなくなってしまいます。そうではなく、選手にとってベストなのは何か、まずは目指す姿を描き、そこから逆算することが重要です。そうすれば、産みの、あるいは過渡期の苦勞も分かち合うことができるはずですが。「JFA2005年宣言」実現には、その大きな方向性を軸として、必要な体制や具体的な方法を考え、どのように実現していくのか、スケジュールも含め、明確なイメージを持つことが不可欠です。

方向性の共有

まずはこれを、日本サッカー協会全体の考え方、方向性として共有していく作業が大切です。中には痛みを伴うものも出てくるでしょう。しかし、サッカーの先進国と言われている国々でさえ、常にさらなる向上を目指し想像以上の努力を積み重ねているのです。我々日本においても、もう一度「世界のトップ10」を口にし、その大きな目標に向かって突き進んでいく覚悟がなくてはなりません。

そして全国からさまざまな声を吸い上げながらも、時には強いリーダーシップを持って、日本サッカー界全体でこれを共有し、取り組んでいけるようにしたいと考えています。

目指す姿

2015年世界トップ10に向けては、「すそ野を広げ、育成の土台を堅固にし、総合力を高めることで、頂上を高くする」という方向性です。すなわち、単に2015年の目標の対象となるターゲットグループだけを取り出してそこに取り組みを集中することでその一瞬の目的を達成しようとするのではなく、あくまでも総合力を上げることで世界のトップ10を目指すということです。もともと世界のトップ10を目標に掲げたのは、トップ10にコンスタントに入り続ける地力をつけ、その上でFIFAワールドカップの優勝を争う強豪国の仲間入りをしたいという願いです。

そのためには、**2015年、日本をこういう姿にしたい**と考えます。

イントロダクション

- 1 競技環境：リーグ戦文化の定着**
リーグ戦文化が醸成され定着し、長期にわたる拮抗した競技環境が整備され、日々の厳しい切磋琢磨から選手が育つこと。
- 2 拠点整備：さまざまな活動の核として**
地域に拠点が整備され、そこを核としてトレセン活動、指導者養成、JFAアカデミー等が積極的に展開され、有効に発信されること。
- 3 U-12年代の重要性の認識／浸透**
すぐれたフットボーラーとしての基礎を築く年代であるU-12指導の重要性が認識され、子どもたちが全国で日常的に質の高い指導を受けられる環境が整備されていること。

- 4 キッズ年代の充実**
キッズ年代で全国で多くの子どもたちがスポーツ・サッカーに良い出会いをし、生涯にわたりスポーツ・サッカーを愛し支えるしっかりとした基礎を築くこと。
キッズ年代でスポーツ・サッカーに親しみ、コーディネーションに優れ、技術の基礎を身につけた子どもたちがU-12へと進んでいくこと。

- 5 トレーニング環境：指導者の質の向上**
究極には、指導者の質があらゆる問題に関わる。育成年代の選手たちが、全国で日常的に質の高い指導を受けることができるよう、数多くの質の高い指導者がベクトルを共有し活動していること。

主要な軸

これらに取り組むために、総合的な取り組みの中で、主要な軸として、「キッズ、キッズエリート」、「U-12に対する取り組み」、「JFAアカデミー」、「指導者養成」、「ゲーム環境」、「トレセン」、「Jリーグ、Jクラブとの連携」、「その他」を挙げました。

主要な軸

キッズ、
キッズエリート
U-12に対する
取り組み
JFAアカデミー

指導者養成
ゲーム環境

トレセン
その他

「JFA2005年宣言」の夢

もちろん全国の皆さんに大変な労力をかけていることは承知しています。しかし、ここでごんばらないと、おそらく20年先、30年先もまだ同じような議論を同じように続けていることになるのではないかと思います。

「JFA2005年宣言」の夢。その姿を思い描き、これを共有して皆の手で、確信をもって追求し続けていきたいと思えます。

キッズ、U-12年代 キッズ、キッズエリート

キッズ、キッズエリート(～U-10)を、
育成のためのより良い準備という位置づけでU-12へつなげていく

概念の確認

キッズに対する取り組みは、ポスト2002、FIFAワールドカップ
自国開催を受けて、開始されました。
ここで、それぞれの概念を確認しておきたいと思います。

キッズ

U-12にいたる前の段階 (U-6、U-8、U-10)

U-6のサッカー、スポーツとの出会いから、発育発達に応じて、
その後への準備をしていく。

キッズプログラム

多くの子どもたちに、サッカー、スポーツとの良い出会いの機
会を創出し、からだを動かすことが好きな子どもたちを増やす。

キッズエリートプログラム

ベースとしてのキッズプログラムを行う中で、成長や能力、関
心の個人差の存在を認め、それぞれの能力や関心に適したより
良い刺激を与えていく。

“エリート”という言葉をあえて使うのは、日本社会における
「平等」の概念への提言であり、真の意味での“エリート”を
浸透させ、サッカーの面で言えば、その才能と努力で培った能
力を遺憾なく発揮して活躍し、社会にさまざまな面で貢献でき
るような選手を育てていく。

キッズ年代の目標

その中で、キッズ年代の目標は、大きく、以下になります。

1. 小さいころからからだを動かして、サッカー、スポーツに親
しみ、成長に適した刺激を受けることで、生涯にわたるス
ポーツを愛する人を増やすとともに、心身ともに健康でコ
ーディネーションに優れた子どもたちを日本全国で増やす
こと。
2. ゴールデンエイジ前の準備として、左右の足でボールを自由
自在に扱うことができるようになった状態で、U-12以降の
育成をより充実させることができるようにする。

育成をつきつめればつきつめるほど、下の年代で良い準備がで
きているかどうか重要になってきます。ただし、それはあく
まで「年齢、成長に即した」準備です。その誤解のないよう、
年齢、成長に即した中で、質の高い刺激を与えることで、その
後の育成のためのしっかりとした土台をつくることができま
す。

そしてそれは、普及の広いすそ野の大前提があって、はじめて
実現することです。

今までの主な取り組み

- ・ U-6、8、10キッズ指導ガイドラインの作成
- ・ 指導者養成：キッズリーダーインストラクター養成
⇒キッズリーダー養成
- ・ その他のライセンス講習にてキッズの内容をカバー
- ・ U-6、U-8/10キッズハンドブックの作成
- ・ キッズプログラム、キッズエリートプログラムリーフレット
の作成
- ・ 保護者向けハンドブック「めざせベストサポーター」の作成
- ・ キッズドリルの作成
- ・ JFAチャレンジゲーム めざせクラッキ／めざせファンタジ
スタの作成

現状の問題点

取り組みを重ねてきた中で、現状、まだ不十分な点、改善が必
要な点が存在します。

- ・ 「キッズ」の概念、「キッズエリート」の概念の理解と浸透
が不十分
- ・ キッズエリートプログラムのガイドラインの作成が必要
- ・ 4種への移行、種別を超えた連携をスムーズにしていける必要
- ・ キッズ年代に不適切なゲーム形式で行われる大会がある
- ・ 「めざせクラッキ」のより広い普及を
- ・ 保護者へのアプローチが不十分
- ・ グリーンカードの普及が不十分

キッズ、U-12年代

今後の主要な取り組み

1. キッズ、キッズエリートのコセプトの徹底
2. サッカー外へのアプローチの強化
3. キッズから4種へのスムーズな移行
4. 保護者、関わる大人へのアプローチの強化

1. キッズ、キッズエリートのコセプトの徹底

2003年からのさまざまな活動、キッズエリートのリードFAによるトライアルを受け、キッズエリートのガイドラインをまとめる時期にきています。キッズ指導ガイドラインの内容を再検討し、その後の新たな取り組みやキッズエリートの考え方、ガイドラインも含めて、指導ガイドラインを更新することで、コセプトを再度確認し、徹底していきます。

2. サッカー外へのアプローチの強化(教育機関等)

キッズ年代に関しては、必ずしもサッカーに限定したものではなく、より広い対象への発信が目的です。キッズプログラムの考え方、キッズ指導ガイドライン、保護者向けハンドブック、めざせクラッキ等は、サッカーを越えた対象へ届けたいものです。そのため、他競技団体や教育機関等へのアプローチを強化し、広げていくことが必要と考えます。

3. キッズから4種へのスムーズな移行

キッズとは、もともとU-12年代にいたる過程全体を想定したものであり、だからこそU-10までとしています。一部、それが十分に理解されておらず、U-6のイメージが強いケースがあります。また、大きな新規事業として、キッズに特化する組織を組んで取り組むことで、その努力によりキッズ年代の発展は大いに進みましたが、他の種別のケースと同様、4種との連携、移行がうまくいっていないケースがあります。子どもたちが良い準備をしてその後の過程に良い形で進むことができるよう、環境を整える必要があります。キッズU-6でサッカーに出会い楽しんだ子どもたちがその後やる場を失うようなことがないように、その環境について考えていく必要があります。

4. 保護者、関わる大人へのアプローチの強化

キッズの範囲に限りませんが、低い年代であればあるほど、保護者や関わる大人は、ポジティブにもネガティブにも大きな影響を与えます。そのため保護者へのアプローチとして、ハンドブック「めざせベストサポーター」を作成し、配布してきましたが、大会等で見られる情景、あるいは指導者とのディスカッションからは、まだまだ、保護者や周囲の大人の理解、関わり方について、さまざまな問題が挙げられます。ハンドブックのみでなく、他の手段も検討し、アプローチを強化していく必要があります。

キッズ年代は育成、ひいては日本サッカーの土台です。

この年代のサッカー・スポーツ環境が充実した質の高いものとなることは、日本サッカー全体を直接的・間接的に支える大きく堅固な土台となります。

キッズプログラム、キッズエリートプログラムの充実・発展により、堅固な土台を築きます。

U-12に対する取り組み

サッカー選手としての将来の成長に必要なベースとしての基本要素をこの年代で高いレベルで獲得しておく

この年代の位置づけ

U-12年代は、個人としての基礎作りを完成させるU-13、U-14年代の前段階として重要な準備期間となります。以前より、ゴールデンエイジという技術習得に有利な特別な期間として重視されてきました。そのレベルをさらに上げる必要があります。この年代に必要な準備ができていないと、いかにそれ以外の、例えば体格や運動能力の面で人より秀でた面を持つようになったとしても、そのスペシャリティーを高いレベルで発揮できるようには決してなりません。そういった意味で、すべての子どもたちに良い準備をさせておくことが重要です。

また、U-12年代ではより多くの子どもたちに大きな可能性があるため、より多くの選手に日常的に良い働きかけをする必要があります。

この年代の主要な目標

- ・ U-12指導の向上
- ・ 質の高い地区レベルのトレセン活動を、全国で戦略的に充実させる
- ・ U-12に適したトレーニング環境、試合環境の改善

今までの取り組み

・ ナショナルトレセンU-12を9地域開催へ

従来、全国で1ヵ所の開催でしたが、それでは対象とできる参加選手が非常に限られてしまいます。この年代ではより多くの選手に大きな可能性があり、良い刺激を広く与えたいと考え、参加選手を増やすことを主な目的に地域ごとの開催に変更しました。

・ C級指導者養成カリキュラム改訂

公認C級コーチ養成講習会はU-12年代の指導を内容としたライセンスです。今までも4年に一度、カリキュラムを見直しています。2007年がその年にあたり、2006 FIFAワールドカップ・ドイツのテクニカルレポート、テクニカルアドバイザーであるクロード・デュソー氏とのディスカッション等を踏まえ、現代サッカーのトレンド、その中で日本サッカーの目指すべき方向性、そのためにU-12でしておくべき準備を考え、カリキュラムを改訂しました。

・ A級U-12を新設

従来のライセンスの構成は、C級がU-12、B級がU-18、A級がプロを除くすべて、という対象の内容となっていました。U-12年代の特別な時期として重視し、その専門性を高め、この年代のスペシャリストを養成するために、公認A級コーチU-12養成講習会を新設しました。

・ U-12指導指針作成（2004、2007）

2003年より、キッズU-6をはじめとし、2歳刻みで年代別指導指針を作成しました。2006 FIFAワールドカップ・ドイツのテクニカルレポート、テクニカルアドバイザーであるクロード・デュソー氏とのディスカッション等を踏まえ、現代サッカーのトレンド、その中で日本サッカーの目指すべき方向性、そのためにU-12でしておくべき準備を考え、指導指針2007年版を作成しました。

・ U-12年代での8対8の推奨

U-12年代でサッカーを学ぶのにより適したゲーム形式として8対8を推奨してきました。

・ キッズ～U-12年代でのグリーンカードの推奨

フェアプレーのポジティブなとらえ方として、グリーンカードを作成、推奨してきました。

キッズ、U-12年代

現状の問題点

・技術習得の質をもっと上げる必要

左右の足で自由自在にボールを扱える選手は、あまり多くありません。また、止まった状態でのボール扱いはできて、実際のゲーム局面で必要となる、動きながらの技術となると、まだまだ不十分です。

さらに、パスをしたら動く、ボールに寄る、といった個人の基本が習慣として身につけていません。

・多くの子どもたちに良い刺激を有効に与える必要

U-12の場合、より多くの可能性がある子どもたちに刺激を与えるには、地区トレセン単位の活動が有効ですが、サポート不足、また間接的なアプローチとなるため、情報やコンセプトの迅速で正確な伝達が困難である場合が多いのが現状です。

・この年代でふさわしいゲーム環境

この年代の子どもがサッカーを学ぶのにふさわしいゲーム環境になっていない現実があります。ゲーム形式、そして、指導者や保護者等環境を含めた問題があります。

「モデル地区トレセン」のトライアル

「モデル地区トレセン」

全国で生活圏内にて日常的なトレセン活動 A級U-12取得者の中から指導者を認定⇒地区トレセンの内容、質に働きかけ

数値目標	2008年	5	2009年	10
	2012年	50	2015年	150 ⇒ 最終形 300

トレセンシステムによって、ナショナルトレセンからの発信が、地域、都道府県、地区へと伝えられる仕組みになっています。ただし、それが先にに行けば行くほど、伝達に多くの人・時間がかかることで、間接的なアプローチとなり、われわれのサポートも不十分で、情報の迅速で正確な伝達に困難をきたす場合が

多々あります。

その一方で、育成のベースを築くU-12年代の重要性を考えると、下の年代であればあるほど、可能性は広く全国多くの選手にあると言えます。したがって、多くの選手に質の高いアプローチをする必要があります。また、下の年代であればあるほど、生活圏内を越えた活動が困難であり、日常生活の環境の中で、頻度高く良い刺激を与えるほうが効果的となります。

つまり、多くの可能性のある全国の子どもたちに、日常生活圏内にて、なるべく頻度高く良い刺激を与えたい。そのためには、地区トレセンの活用が有用であり、その充実が望まれます。そして、良い刺激を与えるために、質を重視する必要があり、既存の地区トレセンシステムへ、直接的にアプローチする可能性を探ることとしました。それが「モデル地区トレセン」です。能力の高い子どもたちが無理なく集まることのできる生活圏内での地区トレセンにて、高い頻度で（週1回目標）、A級U-12ライセンス保持者によるトレセン活動を実施します。A級U-12ライセンス保持者の中から、認定して指導者を出していき、「地区トレセン」の内容、質、方向性に直接JFAが働きかけることを狙いとします。担当指導者は、定期的な研修により、コンセプトの確認を行いつつ活動します。この名称が示すとおり、地区トレセンの「モデル」となり、周囲の他の地区トレセンへの発信、レベルアップの一助になることも期待します。世界でも、この年代へ広く直接的にアプローチする方向性になってきています。2008～2009年をトライアルとし、A級U-12指導者養成の展開とともに、この数を増やし、2015年には150カ所、最終的には300カ所を目標としています。可能であれば、この数字、速度はもっともっと上げていかなくてはならないところです。

多くの子どもたちに可能性のあるこの年代に、より多くの選手たちにより刺激を与えることを重視します。

そして、サッカー選手としての将来の成長に必要なベースとしての基本要素をこの年代で高いレベルで獲得しておき、以後の育成をより質の高いものとするを目標とします。

トレセン改革

日本の育成の軸・発信源として、トレセン活動のさらなる充実
⇒ さまざまなトライ

1. トレセンの成果および今後の方向性

トレーニングセンター（トレセン）システムは開始以来、多くの指導者の支えを得て、世界に誇る日本型ユース育成システムとしてとして確立し、多くの選手を育ててきました。

しかし、2005年宣言の実現のため、すなわち世界のトップに並ぶためには、ここで足踏みせず、さらなる改革の必要性に迫られています。

2006 FIFAワールドカップテクニカルレポートを踏まえ、今後の方向性を考えると、大きく以下の3点に集約されます。

1

選手へのアプローチをより重視

双方向の流れ（選手の発掘・強化とコンセプトの発信）の中で、発信の面ではさまざまなツールが確立されてきたので、原点に戻り選手へのアプローチを中心に考える

2

継続した活動

サッカーのみならず、人間教育の面も含めて考えると単発の活動にならず、継続性を持たせることが重要

3

年齢段階に応じた適正人数の構成

可能性のある選手に広く刺激を与えていくことと、活動を充実させて選手に変化をもたらすことのバランスを、年代に応じて考えていく

2. ナショナルトレセン

1) U-12 地域開催で多くの可能性ある子どもたちに刺激を！

低年齢になればなるほど、可能性のある選手は多く存在します。その観点から2004年から9地域開催に変更し、全国で約600名の選手を招集しました。また、地域内の指導者が研修に参加しやすい環境をつくり、JFAのコンセプトを多くのコーチと共有する体制に近づいてきました。

今後はA級U-12ライセンス取得者、地区トレセン等と密接に連携をとりながら充実させていきます。

2) U-14 エリートキャンプとのリンクで継続的な活動を！

U-14は可能性を秘めた選手が散在している年代であり、段階的にJクラブの選手を外して、中学校や街クラブの選手を招集することとしました。また招集する人数は絞り、3ブロックで年間2回の活動とし、毎回140名程度を招集することとしました。今後は、ナショナルトレセンとエリートキャンプをリンクさせ、単発に終わらず継続した活動を行っていきけるようにします。すなわち、ナショナルトレセンでは、Jクラブ以外の中学校や街クラブの選手に複数回の活動で刺激を与えていき、エリートキャンプは「地域」で、Jクラブも含めた地域内のトップレベルの選手を招集して行います。

海外活動に関しては各地域キャンプから選手を選抜して日本選抜として活動し、人間教育も含めた形で継続して行える体制を整えていきます。

3) U-16 代表チームのラージグループとして質の高い活動を！

U-16は大人のサッカーの入り口であり、代表チームとして活動を始める年代に当たります。そのため、「ナショナルトレセン」から名称を「ナショナルトレーニングキャンプ」に改称し、U-20に向かうチームのキャンプと位置づけました。東西2カ所で年間2回の活動とし、毎回80名程度の選手を招集し代表のラージグループを形成していきます。U-15・16年代の2年間で4回のナショナルトレーニングキャンプを代表活動とリンクさせて行い、U-17年代でU-20に向かうチームにスムーズに移行すること、さらに質の高い強化が行えることを目標としています。

トレセン改革

4) U-17以降 国体以降の強化～U-17地域キャンプと地域対抗戦

国体少年の部が2006年からU-16化しました。U-16になったことで2、3、4種の種別を超えた育成が重要になり、47都道府県サッカー協会での一貫指導体制の構築に向け大きな前進をすることができました。

その他にも多くのストロングポイントがある国体U-16化ではありますが、その裏側にウイークポイントも少し出てきました。今までは、高校2年生くらいから頭角を現す遅咲きの選手や、チームでは全国大会等への出場は難しいが個人で高い能力を持った選手が国体でフォローされていましたが、この部分はU-16化によってできなくなった面がありました。そこで、2007年から国体以降も継続して強化できる体制をとりました。地域でのキャンプで年数回強化を行った後、12月には高校選手権出場チームおよびJクラブ以外を中心に選手を招集し、対抗戦の形で発掘・強化の場を設けました。すなわち、たとえチームとしては、上のステージでできなかったとしてもそこからJFA選抜として代表への道も開けることが可能となります。

3. 地域・47FA・地区トレセン**～継続したトレセン活動****(毎月1回のトレセンマッチデーの創出と統一)**

16歳以下においては、毎月1回のトレセンマッチデーをつくり、公式戦を入れずにトレセン活動等、所属チーム以外で活動できる日をつくることを目指しています。しかし、すべての地域で実現しているとは言えず、また、地域および都道府県内での交流、あるいは種別を超えた交流を進めようとするれば、トレセンマッチデーを統一していくことも必要になります。しかし、それが実現されれば、種別を超えた指導者の交流や選手の交流が活発に行えることとなります。

各FA内で種別や連盟を超えて一貫指導体制を確立するために、年間を通した定期的なトレセン活動を行っていきたいと考えます。

一方で、U-12年代に関しては、多くの選手にアプローチできる日常的なトレセン活動（生活圏内の地区トレセン）が最も重要であり、先述のモデル地区トレセンは2008年からトライアルとして開始し、JFA2005年宣言の実現のために、2012年に50ヶ所、2015年に150ヶ所、最終的には300ヶ所（4種登録チーム約30チームに1ヶ所）を目標に広めていきたいと考えています。

ナショナルトレセン

- 1) U-12：地域開催で多くの可能性ある子どもたちに刺激を！
- 2) U-14：エリートキャンプとのリンクで継続的な活動を！
- 3) U-16：代表チームのラージグループとして質の高い活動を！

地域・47FA・地区トレセン

継続したトレセン活動（毎月1回のトレセンマッチデーの創出と統一）

U-12では日常的な地区トレセンの重視、モデル地区トレセンの創出

今後も、育成の軸、発信源として、第一に選手へより良い刺激となるような活動を目指し、つねにより良い形を目指していきたいと考えています。

JFAアカデミー

JFAユース育成のコンセプト発信源であり、モデルとしての役割

JFAアカデミー福島の充実、成果

目標 発信機能の重視： コンセプトをより効果的に発信し浸透させるために、計画的に増やしていくことが必須(地域拠点としての機能)

1. はじめに(背景)

日本サッカー界は、トレセン制度、指導者養成をはじめとする、全国の指導者の力によって、ベースは間違いなくレベルアップしました。若年層全体の水準の向上を重要視し、その方向に大いに取り組んできた結果、その成果はある程度あがってきたと考えています。そして今、新たに掲げた目標に向けて、一步前に進むために、ベースの向上とエリート教育の両者を共存させていく必要性を痛感しています。

ボトムアップとプルアップ両方のアプローチが必要と考えます。プルアップにより、エリート教育の成果を還元し、社会全体を引き上げていくことにも取り組んでいく必要があります。世界のトップ10を目指すには、今までと同じ方法では間違いなく追いつきません。先天的な能力のある者に良い環境を与え、本人が努力してはじめて世界基準の選手へと育てていくものであり、それが全体のレベルの引き上げにも必ずや還元されると確信しています。

2003年よりエリートプログラムのトライアルの開始を初めとし、さまざまな準備を重ね、2006年4月より、JFAアカデミー福島を開校しました。

2. 目的

～世界トップ10を目指した個の育成～

「世界基準」をキーワードとし、チーム強化ではなく、あくまでも個を育成することを目的とします。

ロジック形式(寄宿制)による中高一貫教育により、能力の高い者に良い指導、良い環境を与え、長期的視野に立って育成します。

また、サッカーばかりでなく、人間的な面の教育も重視し、社

会をリードしていける真のエリート、すなわち世界基準の人材、常に(どんなときでも、日本でも海外でも)ポジティブな態度で何事にも臨み、自信に満ち溢れた立ち居振る舞いのできる人間を育成することを目的とします。

才能を持つ者に良い環境を与え、本人の努力を伴わせることにより、世界に通用する選手を育成します。

3. JFAアカデミー将来計画に関する考え方

JFAアカデミー設置の意義・目的：

- ・プルアップ効果によるユース育成のさらなるレベルアップ
- ・育成のモデルを全国に提示すること
- ・日本サッカー協会の育成のフィロソフィーを全国に提示すること

JFAアカデミーは、そこで特定少数の選手を代表予備軍として強化しているものではありません。したがって、JFAアカデミー福島1カ所で特定少数の選手を育成するのみでは、この目的から考えると不十分であり、このJFAアカデミーの考え方をより全国に効果的に広め、日本全体のユース育成に働きかけるためにも、同じコンセプトで活動をする機関を全国で数カ所に増やしていくことが重要です。

特にユース年代では、可能性のある選手は全国に点在しており、それらのポテンシャルに効果的に働きかけることで、レベルの高い個の発掘・育成、ひいては日本サッカーのレベルアップの確立を高めていくことができると考えます。

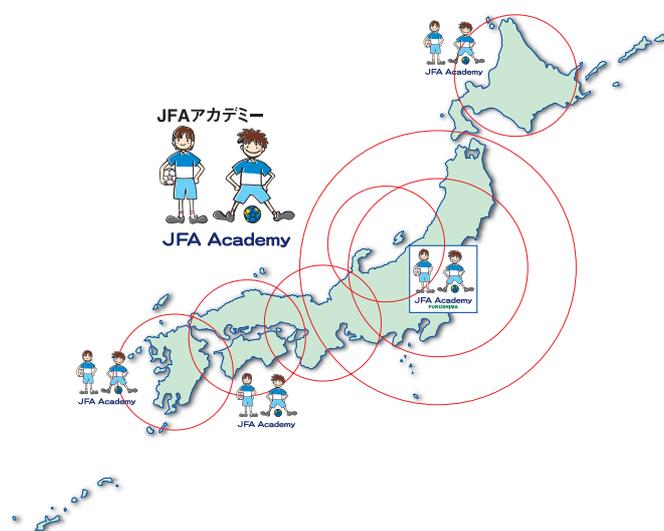
JFAアカデミー福島を核として、将来に向け、計画的にこの目的に向けての手段を検討していく必要があります。

4. アカデミー地域展開に向けて

中学校を対象にアカデミーを広げることにより、タレント発掘・育成を高いレベルで進め、あるいは周囲に刺激を与えることで、日本サッカー全体に働きかけることができると考えます。

■位置づけ：

JFAアカデミー福島は、JFA直轄の軸となるアカデミーと位置づけます。県、教育委員会との調整による対応、中高一貫校のモデルとして広く社会へ発信する存在としても位置づけられます。他地域に今後新設するJFAアカデミーに関しては、中学のみ、あるいは毎週末に帰らせる体制とするなど、さまざまな形が可能であると考えています。



現状の福島1カ所では、地域によっては距離的に非常に遠く、入学者の側に負担があり、現状では入校を希望してもなかなかトライすることが難しい状況です。才能ある選手は全国に散在しており、それをカバーするためにも、全国に数カ所のアカデミーが開設され、地域性を生かしたアカデミーが運営されることが望ましいと考えます。

■地域の拠点としての役割：

地域の拠点として機能し、地域にフィロソフィーや方法を発信するとともに、ハード面、ソフト面の両面で地域のサッカーの発展に貢献・寄与することが期待されます。

コンセプトをより効果的に発信させるためにコンセプトの賛同・共有を前提にさまざまな形態で展開していく

2009年度
ロジング（寄宿・週末通い型）+1
その他モデルケース検討

↓

2015年までに全国でロジング形式5カ所
通い型アカデミーを30カ所

育成のモデルを示し全国への発信機能を高めるため、また、拠点としての機能を果たし地域の充実に貢献するため、JFAアカデミー福島を充実させるとともに、さまざまな形、方法を検討しつつ、他地域への展開を積極的に進めていきたいと考えています。

指導者養成

究極には指導者の質があらゆる問題に関わる日常の指導の質を向上させるために、指導者のさらなる質・量の向上のための講習拡大に伴う質のコントロール

指導者は子どもたちの未来に触れている!

選手は日常のゲームとトレーニングによって成長していきます。質の高い指導者が全国に数多くいて、日々質の高い指導がなされることが理想です。ゲームへの臨み方も、指導者の育成のフィロソフィーが大きく関わります。指導者は子どもたちの未来に触れています。究極には、指導者の質があらゆる問題に関わると言っても過言ではありません。

JFAでは、指導者養成事業に注力してきた結果、2008年現在、全国で5万人を超える情熱のある指導者が日々活動しています。地域の多くの方々の情熱によって、日本のサッカーは日進月歩の発展を成し遂げてきています。しかしながら、「JFA2005年宣言」にある約束を果たすためには、これまで以上に我々の強みをもって、我々日本にしかできないような方法論で世界に打って出る気概が必要です。そのための鍵となるのがまさに指導者養成ではないでしょうか。その指導者の現状を分析すると、これまで以上に日常の指導の質を上げる必要があります。そして、質の高い指導者を今まで以上に増やしていく必要があるのです。資質のさらなる向上を求めたリフレッシュ研修会の充実、多くの指導者の情熱、学習意欲の高さに見合う講習数の提供を考えていけば、単に講習数を増やすだけでなく、講習の質をコントロールすることが大事となります。そして、質をより向上させるための専門性へのアプローチが必要なのです。世界のトップ10を目指す上でも、世界から注目されるような指導者、世界で活躍できる指導者の養成を行っていきたくと考えています。

1. 公認コーチの増加 コース数拡大と内容充実

コースごとの養成目標をより具体的かつ明確にし、評価がより適正に展開されるようにプロジェクトで定期的に検討していきます。公認B・C・D級コーチ養成講習会においては指導者養成に対するニーズに応えるべく、コース数を拡大。新たにJクラブ開催コースを導入して地域に根ざしたものを目指します。ま

た質的低下につながらないように、インストラクター研修を充実させていきます。公認S・A級コーチ養成講習会に関しては、リーダー的な役割を求めているので、量的な拡大は行わず、質的向上を追求していきます。

2. トライアルリフレッシュの導入 ～受講者選考に関して～

公認A・B級コーチ養成講習会の受講者の選考にあたっては、適正な方を推薦していただくために、多くの都道府県サッカー協会（FA）で指導実践や面接、FA技術委員会での書類審査を実施していただいています。B級は2008年度から各FAにて、A級の受講も2009年度からは9地域からの推薦に移行します。JFAインストラクターを地域に配置しましたので、地域のユースダイレクター、FAの技術委員会、ユースダイレクターと協力して実施を促進していきたいと考えています。それ自体が非常に良い研修となると考え、ポイント対象のトライアルリフレッシュと認定しています。まだ実施していないFAにおいても早急に取り組んでほしいと願っています。

3. カリキュラムの検討と改訂

絶えず世界のサッカーの流れと日本の現状とを照らし合わせる作業を続けながら、基本的に4年に一度カリキュラムを見つめ直し、改訂を行っています。今回は2006 FIFAワールドカップテクニカルレポートから世界をスタンダードに捉え、日本の課題や強みを分析し、確認したものになっています。そして、1年間実施し、改めて伝わり方の不十分なところや、発信方法（誤解が生じていないか etc）など具体的に吟味し、47FAインストラクター研修に反映させています。

指導者養成

4. リフレッシュ研修の充実

ライセンス取得はゴールではありません。コーチの再教育は最も重要なものと認識し、JFAとしてリフレッシュ研修をさらに充実させていく努力をしています。有資格者に対するリフレッシュは、ポイント制に切り替わって4年目に入ります。新たに導入されたEラーニングコースに加え、各FAで行う地域に根ざした研修から世界のトップに触れる海外研修ツアーまでさまざまなニーズに沿った形で有意義な研修が行えるようコースを充実させていきます。

5. A級U-12の取り組みと展開

U-12はゴールデンエイジという特異で重要な時期であり、この年代での指導こそが将来を決定づけると言っても過言ではないと思われます。この年代の指導に携わり、指導課題も留意点も他の年代とは異なる部分の勉強を深めたいという指導者のニーズに応えるため、2007年より公認A級コーチU-12養成講習会を開設しました。これは、若年層に関わるコーチがそのスペシャリストとしてリスペクトされる環境を創り出したいという意味も含まれています。

その修了生の中から2008年度はモデルコーチを指名し、モデル地区トレセンがスタート。2008年度の目標はトライアルとして5カ所、2015年には150カ所を、そして将来的には、可能性を秘めている子どもたち一人ひとりに良い環境を全国で淀みなく提供するために、約30クラブに1地区のトレセン、そのためのモデル地区トレセンは300カ所を考えています。しかしそれには、各FAの理解やJクラブの協力のもと、計画的にA級U-12の受講者を推薦してほしいと願っています。2009年にはA級U-12を2コース開設、またS級既得者の方々のA級U-12コース（モジュール）も開設します。モデル地区トレセンスタートにあたっては、さまざまな障壁があると考えますが、そのハードルを着実に越えていくためにも、私たちが、つねに立ち返るべき合言葉“Players First!”を思い出して進んでいきたいと思っています。

6. 海外で活躍する指導者の輩出

JFAでは、海外戦略プロジェクトを立ち上げました。目的はJFAのコーチのスキルアップとアジアへの貢献です。2006年より、Jヴィレッジにおいて、インターナショナルコーチングコースを開催し、また、在留邦人や現地指導者に対してのキッズリーダーおよび公認D級コーチ養成講習会等、アジアからのニーズが増えてきています。そこで、そのニーズに応えるため、JFAでは、ナショナルトレセンコーチや47FAインストラクターを中心に、講師を戦略的に育て、計画的に派遣できるように、人材バンクの設立や経済的な支援を考えています。そこで経験したことをフィードバックする仕組みを構築し、お互いが切磋琢磨できる環境を作り、やがて日本が世界に打って出ることの基盤づくりを期待しています。まずは、海外で活躍するコーチ15人を目標に、JFAを代表して、アジアだけでなく世界からも求められる指導者を養成したいと願っています。

7. 指導者養成の「こころ」

『夢を持つことが、子どもたちの強い心をはぐくむ。夢があるから、子どもたちはあきらめずに努力できる』。これはJFAこころのプロジェクト ユメセンテキストに掲載されている言葉です。子どもたちが自らたくましく育っていくように、私たちは子どもたちに何ができるかを考え、具体的に関わっていく必要があります。指導者は子どもたちの興味関心、能力に合わせた環境を提供することが大切です。もちろん「サッカーを」教えることは大事です。そして「サッカーで」心豊かな人間性を育むことも指導者の重要な役割ではないでしょうか。子どもたちが安心して何事にもトライでき、リスクを冒してチャレンジできる環境を指導者が提供することと、指導者が子どもの無限の可能性を信じて、優しく見守る姿勢が大事であると思います。

日々のトレーニング環境を預かるのは指導者であり、究極にはあらゆる問題に指導者が鍵となります。コンセプト理解者を増やし、全国の指導者の情熱に応えるように、質・量を充実させる指導者養成を展開していきたいと考えています。

ゲーム環境 I. リーグ戦文化の醸成

選手が自らの力でたくましく育っていく環境

1. リーグ戦導入の必要性 ～ゲームこそが選手を育成する～

サッカーで最も楽しいのはゲームであり、ゲームを行いサッカーの楽しさを知ることが一番ではないかと思えます。楽しさが分かってきたら、もっと楽しくするために「自由自在にボールコントロール」ができればいいと思うことでしょう。トレーニングにも目標ができ、トレーニングの成果をゲームで試しつつ、どんどん上手になっていきます。つまりゲームがあるから、トレーニングでうまくなりたいたいと思うのです。言い換えれば「ゲーム」が選手の意欲をかき立て、選手自身の自主性を引き出す要因だと考えます。だからこそ大人が育成年代にどのようなゲーム環境をつくっていくかが重要であり、我々コーチの重要な責務であると考えます。

リーグ戦文化の醸成とは、トーナメント戦を否定しているものではありません。トーナメント戦には多くの魅力があります。しかし勝つことで次のチャンスを得る闘いは、刹那的な勝負を繰り返すことにもつながり「リスクにチャレンジ」するよりも「リスクを負わない」、あるいは「封印する」割合が多くなるのも事実であると思えます。

逆に「リスクにチャレンジできる」あるいは、「リスクにチャレンジ」していったチームこそが、最終的に栄冠を勝ち取る可能性が高いのがリーグ戦です。ゲームから成果と課題を導き出すには、ゲームの中でリスクにトライしていかなくてはなりません。そこからゲーム分析をして、課題を解決するトレーニングを行い、再びゲームで確認することで、指導者にはゲーム分析力とトレーニングをプランニングし効果的にトレーニングを行うコーチとしての力量が養われます。また選手は失敗を恐れずにリスクにチャレンジする機会が増え、プレーに意図を持つことや、ゲームの流れを考えてプレーをするなど、ゲーム理解を深めていくことにつながります。

またトーナメント戦は負ければ大会終了です。負けた時点でリセットして、次の大会に準備をすれば良いのかもしれませんが、負けたとしても次のゲームに備える必要があるリーグ戦は、シ

ーズン通して結果を求めていくものであり、指導者、選手ともに技術や戦術面だけでなく、精神面でも鍛える場にもなると考えます。

シーズンを通し、拮抗したリーグ戦とトーナメント戦を主としたカップ戦がバランスよく行われるゲーム環境の創出は、日本のレベルアップのためには必要不可欠だと考えています。

2. リーグ戦創出の基本事項

- (1) 年間を通した長期にわたる基軸となるリーグ戦
1シーズン⇒8～9ヶ月、カップ戦での中断はあり
- (2) 能力別リーグ
能力に応じて誰もが楽しめる環境



ただし、移動範囲等について、種別や各都道府県の状況に応じて考える必要がある

- (3) 全員が参加できる
個人登録した選手全員が公式戦に出場できるよう、複数チーム参加可能にする

すべての選手に長期にわたるコンスタントなゲーム環境

長期にわたるコンスタントなモチベーションと、リスクにトライできる環境が必要です。

誰もが自分の能力に応じて楽しめる環境の創出

平等の概念として、「能力に応じて誰もが楽しめる環境」を平等だと考えています。

能力別リーグは決してトップレベルの選手のものではありません。むしろトップレベルではない選手こそ、ゲームを楽しみ、年間通してのゲーム環境があれば、選手として上達する機会があることであり、その中から成長する選手が多く出ると思います。

全てを一つのピラミッドの中に**(1) 強化と普及の両立**

能力別リーグをつくり、リーグ戦間で入れ替えをしていくことで、強化と普及を一つのリーグ戦（複数部制）の中で同時に行えると考えています。強化と普及の垣根がどこにあるかは明確にはできません。強化リーグと普及リーグを違うリーグにするのではなく、同じリーグ戦のピラミッドの中で同時に行うことが重要であると考えます。

(2) 複数部制の基本的な考え方

リーグ戦文化とは、単にゲーム形式がリーグ戦だけでなく、地域に根ざしていくことや、大学リーグのように先輩のつくった伝統を引き継いでいくなどの要因があると考えます。地域に根ざすためには、年間を通して地元でゲームが開催されることや、伝統を継承することを考えたら、毎年の部制をカップ戦の成績で決めるのではなく、入れ替えはリーグ間で行うことによって、チームの闘い方を継承していくことが必要になると思われます。だから年間を通して20ゲーム程度がバランスよく展開されていることが必要だと考えます。

しかし、各種別の特性を考えたときに、年齢によって移動できる範囲や、チームの力量が年によって大きく変動することも事実だと思います。そのため各種別によってリーグ戦の入れ替え方法や、カテゴリーの考え方の基本を共有し、年代ごとに各地域やFAで独自のやり方も必要だと考えます。

**3. 現状の課題と克服に向けた考え方
～何がネックとなっているか～****(1) スケジュール・カレンダーに関して**

課題：既に過密状態であり、新たにリーグ戦の日程を組む余裕がない。公式戦が年間数試合しかないチームがある一方で、強豪チーム等ではさらなる過密を生むのではないか？

考え方：→ 全体で年間カレンダーを調整していくことが必須

リーグ戦創出のカレンダー整理に関する基本原則

1. 各種別とも基軸となるリーグ戦を年間通して行える環境を整える
(8～9ヶ月にわたって、20ゲーム程度をバランスよく配置する)
2. リーグ戦は他のどの大会よりも優先してカレンダーを組む
3. 連盟等の大会はこれをリスペクトするが、その開催時期を連盟間で重ねていく
(上位チームの連盟の大会でのシードを推奨する)
4. JFA主催の全国大会は、リーグ戦をその母体とする
5. 全国大会はシンプルな形式に戻し、リーグの期間が十分取れるように配慮する

①基軸となるリーグ戦が整備されたらカップ戦はシンプルなものに直す

日常こそが選手を育成します。だから基軸となるリーグ戦を整備することが必要であり、全国大会のためや既存の大会の合間を縫ってリーグ戦を行うのでは意味がありません。リーグ戦を整備していく中で、全国大会等カップ戦における短期のリーグ戦はトーナメントでシンプルな形にしていきたいと考えます。

②連盟の大会を尊重する、しかし連盟間でカップ戦の時期を統一していく

リーグ戦をつくりリーグ戦文化を醸成していくことは、連盟の大会を排除するものではありません。それぞれの連盟で大切に育ててきた大会は尊重していきたいと考えます。しかし、各連盟の予選と全国大会の時期を統一すること、すなわち高体連とクラブ連盟また中体連とクラブ連盟のカップ戦を行う時期をできる限り重ねることで、リーグ戦の期間の確保ができると思います。

③各種別のカレンダーを統一していく

現在は協会主催の全国大会が、各種別で違う時期に行われています。年間を通したリーグ戦を創出するためには、協会主催の全国大会の時期を整理していくが必要になります。この改革は種別の中の1大会の改革ではなく、日本の育成年代をトータルで見えていくことが重要であり、種別間の連携をとり育成年代全体のカレンダーをつくっていかねばならないと考えています。

④地域、FAの大会の整備

このリーグ戦改革は未来を見て行っています。「リーグ戦をつくることは総論賛成だが、既存の大会を整理するのは反対」では何も進みません。選手にとって何が必要なのか、刹那的な短期決戦をしている現在の環境を変えなければ、日本のサッカーは変わらないと思います。既に多くのFAでこの趣旨に賛同していただき、多くの好事例が出てきています。

⑤上位チームの連盟の大会でのシード

平等の考え方のもと上位リーグのチームに、連盟の大会においてレベルにあったシード権を与えていくべきだと考えます。そのことでリーグ戦期間を確保することと、力量に差のある対戦を減らしていきたいと思えます。

(2) 運営に関して

課題：試合数が増え、グラウンドの確保、審判の調整をはじめ、運営に非常に負担がかかる。今でも運営側は精一杯であり、これ以上の負担増には耐えられないのではないかと。

考え方：

①運営の簡素化と自主運営

ホーム&アウェイができることが理想であると考えます。そしてゲームの運営は各チームから運営担当者を出しあい、ホームチームが中心となり行うべきだと考えます。審判も基本的にはホームチームが担当しますが、チームで帯同等が難しい場合もあるかもしれません。最低限の必要事項は運営会議で決定して行ったら良いのではないのでしょうか。

②ローカルルールの導入

(固定概念を省みて、創造的なゲーム環境を創出)

- ・1人審判の導入
- ・ユニフォーム規程の柔軟な対応
- ・ホームチームのグラウンドに応じた柔軟なリーグ戦像 等

リーグ戦導入の重要性については、かなり浸透してきていると認識しています。各地での取り組みにより、確実に前進し、多くの好事例が出てきています。

今までの固定観念を今一度省みながら、柔軟な発想で具体的に、新しいゲーム環境をつくりあげていく時期に来ています。それが当たり前の姿になることで、日本サッカーは大きく変わるものと期待しています。

ゲーム環境 II. 大会が選手を育てる

大会は選手を育成する重要な機会である ～大会ガイドライン

- ・試合、大会は育成の大きな柱の一つ。健康・安全の観点に加え、育成、サッカーの習得の観点からガイドラインを提示する。
- ・サッカー協会に登録している全てのチーム・選手がJFA主催の大会に出場できる環境をつくる。
- ・趣旨・意図が重要であり、そのためのローカルルールの適用は47FAユースダイレクターとの協議のもとで実施可能。

ユース年代において、試合、大会は、育成に大きな役割を果たします。選手を育てるのは、トレーニングと試合であり、より良い育成のためには、その両方の環境が育成に理想的であることが大切です。そういった意味で、大会が選手を育てると言っても過言ではありません。大会のあり方は、育成に大きな影響を及ぼします。

ユース年代の大会に関し、ユース育成における技術的観点から、すなわち、長期的視野に立った育成の過程における技術の効果的習得の観点と、選手の成長における安全・健康の観点から、「育成の観点」をより強く出した形で、大会ガイドラインを改訂しました。この趣旨、意図を発信し、徹底していきたいと考えています。

特にユースの大会では、さまざまな状況があります。その中で判断をする際には、「Players First」の精神のもと、ガイドラインの趣旨、意図に立ち返ってご判断いただきたいと思えます。趣旨に即するためには、地区大会等では必ずしも全国大会の規定通りではなく、ローカルルールの適用が必要になる場合もあります。その際には47FAユースダイレクターとの協議の上でローカルルールを適用してください。

選手はトレーニング（指導）とゲームで成長していきます。ゲームのあり方が育成の成果に与える影響は、非常に大きいものです。大会が選手を育てると言っても過言ではありません。こ

の大会ガイドラインについては、普及、徹底のために有効な発信方法を、検討していきたいと考えています。

全員が関わることのできるゲーム形式

人数に関して

- ・8人制も11人制も同じサッカーである。11人制でなければサッカーではない、という考え方から脱却する時期に来ている。
- ・すべては子どものため。子どもがサッカーをより楽しむことができ、将来により良いサッカー選手になるための準備をするために適した形を選択すべき。
- ・一人ひとりのボールタッチ数、また日本の課題であるゴール前の状況の発生頻度、全員が常にプレーに関わる、という観点から、U-12以下での8人制の推奨。11人制開始年齢は12歳と考える。U-10以下は好ましくない。
- ・8人制、11人制の比較資料の提示（ボールタッチ数、ゴール前のプレー回数）

U-12にふさわしいゲーム環境

U-12年代に関しては、8対8を推奨しています。この年代の育成において、各選手がより多くボールにさわり、常にプレーに関わり続ける環境が必要です。そのためにはハーフピッチでの8対8が有効と考えます。

また、長期にわたり日本の課題であるゴール前の攻防のレベルを上げるためには、ゴール前のシーンが頻繁に出現するという意味でも、8対8は有効です。ましてや、さらに下の年代では、8対8、4対4等のゲームにする必要があります。これをさらに普及、徹底させていく必要があると考えています。

さらに、多くの選手に良い準備をさせる方法の検討として、ピリオド制の導入、複数チーム参加等を考えていくとともに、あらゆるポジションを経験させていくことも考えていく必要があります。

U-12にふさわしい、日常生活圏内でのゲーム環境の整備も合わせて行っていきます。次の年代へスムーズに移行していくこと

も重要です。

この年代もキッズ同様、大人（親や保護者）の関わり方の影響が非常に大きいものです。適切な関わり方について、この年代でも発信を強化していく必要があります。

交代に関して

- ・全員が良いフットボーラーになるため経験をさせる。
- ・特にU-12以下は誰もが大きな可能性を秘めているので、大勢の選手に多くの機会を与えることが大切。
- ・海外の事例の引用（2004年U-12指導指針より）

全てのポジションを経験 ～11人全員がフットボーラー～

- ・ポジションは早期に固定せず、U-14まではさまざまな経験をさせる。
- ・現代サッカーの傾向として、GKである前に優れたフットボーラーであることがますます重要になってきている。フィールドプレー、ゲーム理解を高めるためにも、フィールドプレーの経験が重要。
⇒ FPにGK、GKにFPを経験させる。
- ・これを実現するための、ユニフォーム規定の柔軟な適用。

体力に応じたピッチサイズと時間

ピッチサイズに関して

- ・多くの人数が楽しめることを優先する
- ・技術、戦術の習得に適したサイズを考える
- ・フルピッチの固定観念からの脱却

試合時間に関して

夏季大会に関して

たくましい選手の育成

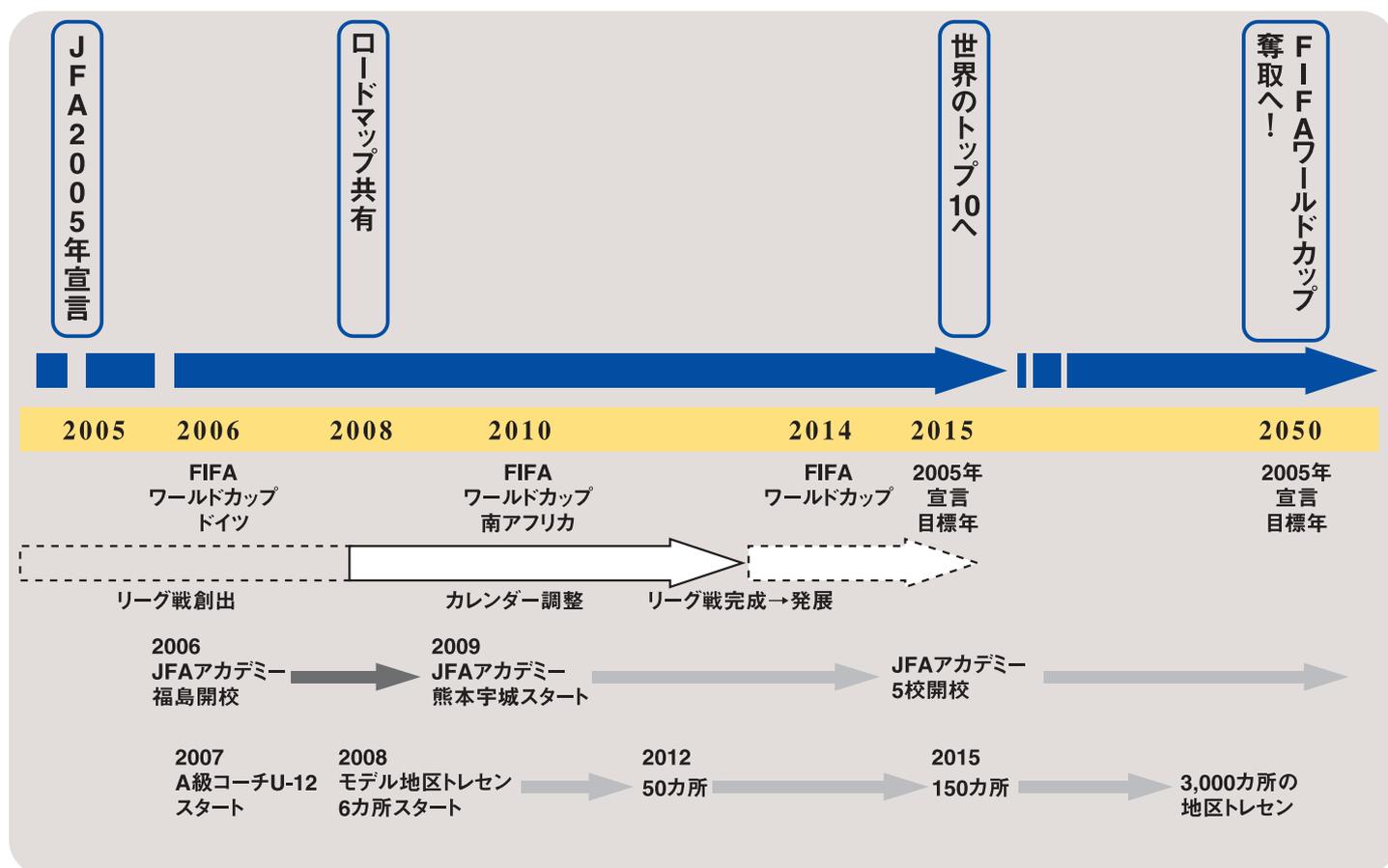
レフェリング／フェアプレーの推奨

- ・自立したたくましい選手の育成。そのために技術・審判の協調と双方の努力、サッカー理解が必要。「スピーディーでフェアでタフなゲーム」を目指す。
- ・「ささいなファウル」は「ファウル」、激しくてもフェアなコンタクトはノーファウル。
- ・ファウルであってもプレーを続ける意志があれば、アドバンテージの適正かつ積極的な活用。
- ・選手はプレーに集中する。指導者からの働きかけが重要。

大会ガイドラインはプレーヤーのためのもの

ガイドラインで重要なのは形ではなく意図、狙いです。ユース育成の観点からは、意図、狙いに基づいて、柔軟な判断をしていただくことが必要です。長期的な育成の過程の中で、多くの子どもたちが十分にプレーをし、楽しむ機会を得ること、安全であること、その上で技術・戦術等を適切に伸ばすことができる環境、設定を与えることを目指しています。

ロードマップ





発行：財団法人日本サッカー協会

〒113-8311 文京区サッカー通り JFAハウス

電話：03-3830-2004 ファックス：03-3830-2005

編集：財団法人日本サッカー協会 技術委員会テクニカルハウス

制作：エルグランツ株式会社

印刷：アサヒビジネス株式会社